

平成 30 年度 出前まちづくり委員会 in 浜坂 事業 実施レポート

記録：兵庫県建築士会まちづくり委員会 土佐

兵庫県下の各支部を廻り、それぞれの地域で地元建築士とまちづくり委員会メンバーが共に学び、今後の地域まちづくり活動の活性化に活かすことを目的とした出前まちづくり委員会も今年で 18 回目を迎えた。

今年度は浜坂支部との共同主催で、平成 30 年 11 月 9 日（金）新温泉町浜坂「味原川周辺地区景観形成地区」を訪ね、まち歩きやフォーラムを通して地元の景観整備活動の 16 年間の経緯を学んだ。さらに活動の今後の課題について、また、少子高齢化を迎える日本全体の課題、人口減少やまちづくり活動の後継者不足について、地元活動団体の方々、関連深い地元行政などの方々と建築士が活発に意見交換を行った。参加者それぞれの「気付き」を誘い、情報の共有と地域まちづくりの支援につなげることができたと考えている。

◆ まち歩き（12:30～13:45）

平成 14 年に発足した“味原川清流会”は、味原川が浜坂の歴史・文化・生活にとってかけがえのない大切な川であることを認識し、環境整備の活動を通して地域に貢献をする住民組織である。平成 15 年から会長を務める岡部良一氏のガイドで、清流会の尽力で整備された川沿いのあじわら小径をたどり、橋からは、川沿いの石垣、土塀を望んだ。今風に言うと、まさにインスタ映えするスポットで、あいにくの雨にも関わらず、岡部会長の朗らかな解説と川沿いの風情に引き込まれていった。石垣は野づら積み、谷積み、亀甲積みから昭和の擁壁まで様々な種類が見られ、地区景観の大きな見どころになっている。橋を渡り、細い坂道沿いに復活した井戸は湧き水が満ち、洗い場も復元されて当時の生活の様子が伺える。次に訪れた七釜屋森家は十代続く元庄屋の造り酒屋で、明治期築の建物は現在、浜坂先人記念館“以命亭”として資料展示、コミュニティスペース、ギャラリーが併設された多目的施設になっている。座敷に展示された貴重な家財や浜坂出身の著名人の足跡を学び、その後、明治末期に山陰線鉄道工事の犠牲者をとむらった西光寺に寄進された煉瓦造の塀や、昭和 53 年に温泉が発見された後、各住戸に引き込まれた温泉の源泉塔、江戸時代は北前船の避難港だった旧浜坂漁港などを見学した。

雨が強まり、見学した範囲は多くはなかったものの、味原川のせせらぎのように江戸、明治期から昭和、平成へと歴史の流れを体感した濃密な時間となった。



あじわら小径 井戸と西光寺の石積み



以命亭 内部



西光寺 煉瓦塀



清流会で最初に手作りした看板

◆ フォーラム「浜の月 味原小径に君の夢」

(14:00～16:40) 於 浜坂多目的集会施設 1階会議室

まちあるき参加者に加えて、総勢37名（地元の方々及び行政等関係者16名 建築士会21名）が集まり、まちづくり委員会委員長田村嘉朗から開会の挨拶の後、浜坂、そして日本のこれからのまちづくりについて、活発に話し合う場となった。

◇基調講演 岡部 良一氏（味原川清流会 会長）

放水路の整備に伴い地元で浜坂の宝を見直そうという動きが起こったとき、湧き水を求めて港から川の上流へと町が発展した歴史を大切にしたいという思いから会が発足した。まちづくりは、我が町に自信を持ち、町の宝を誇れるようになるのが基本だと思う。

これまでの川沿いの整備は、技術や材料など地元の方々の善意と行政の協力で成り立っており、無理せず「できる人が、できることを、できるだけ」という合い言葉のもと、月一回の川の清掃や会報の発行など、ゆるやかな活動だったからこそ16年間継続出来たのだと思う。今後は会員の高齢化、地元の宝を活かしたソフト面のまちづくりが課題である。



清流会 会長 岡部良一氏

◇ パネルディスカッション

① 高野 裕氏（元兵庫県浜坂土木事務所 所長）

赴任した平成14年～15年当時、河川整備の概念は、自然環境の保全に加えて、地域の暮らし、文化や歴史も含めた保全、そして地域参加が重要なポイントとしてとらえられており、上流に放水路が作られたことによって防災上の負担が軽くなった味原川沿いに、まちづくりと一体となった環境整備をしたいという思いのもと、発足したばかりの清流会の活動に土木事務所も一緒になって取り組んだ。環境整備計画作成時も地元の方々話し合い、目標を共有出来たことで計画をスムーズに進めることが出来たと思う。今後は川沿いとどまらず、町全体についての将来像を地域で共有して歩んで欲しい。

② 三輪 康一氏（神戸大学 名誉教授）

“景観”とは舞台セットではなく、生活や産業が具体的な姿となって映し出されたものである。また、“水”は人々を引きつける力を持っており、味原川周辺のように生活と結びついた水辺の風景はとても魅力的だ。地域の人々にとっての誇りである景観を守り、より良く暮らし続けるためには、地域が主体となってその魅力を地域内外に発信するエリアマネジメントに繋げることが重要である。

③ 浅見 雅之氏（人・まち・住まい研究所 代表）

前職で景観形成地区指定の調査をしたことが味原川との出会いで、アドバイザーとして地域に関わる多くの人とまちの将来像を共有し、合意形成に繋げるまちづくりの仕事にやりがいを感じている。日本は今後、これまで誰も経験したことがない急激な人口減少に直面する。しかし地方は人口減少の先駆者であり、そのような状況下でも地域主導の元気なまちが成り立てば、最先端なまちづくりとして大都市からも注目を集めることが出来る。まちの生き残りの鍵は大量生産大量消費の対局にあるのではないだろうか。

3名のお話の後、ファシリテーター 萩原（建築士会まちづくり委員会）の進行のもと、岡部氏やパネリスト、参加者間で意見交換を行った。

～活動の継続やこれからのまちの活性化について～

高野氏：かにソムリエならぬまちソムリエとして来訪者にしっかりまちを説明出来る人材を育成することで意識が高まり、まちの活性化につなげられるのではないだろうか。

三輪氏：景観の中に人の営みがあることでにぎわいが創生される。他のいろいろな団体も味原川沿いで活動することで、にぎわいが生みだされるのではないかと。

浅見氏：地域の人々がまちづくり活動をしている人をきちんと評価し感謝の気持ちを表すことが、活動継続のモチベーションにつながる。

岡部氏：放水路の雑草刈りなども含めた整備となると高齢化した会員だけでは負担が大きい。地元主体ではあるものの、行政にも援助をお願いしたい。

上島氏（清流会会員）：小径の舗装の端がよく欠ける。それを子供達がおもしろがって蹴って川に落としたりしている。舗装材料の強度を検討してもらえないかと。

～まちづくりの活動資金について～

浅見氏：クラウドファンディングは単発的な企画に向いており、持続的な活動には不向きかもしれない。全国の浜坂出身者に向けて味原川ファンクラブのようなものを作って会費を集めてはどうか。

高野氏：ふるさと納税は具体的に何に活用されるか明示されているので、浜坂にたまたま縁が出来た私のように、その地域に対してお金を出しやすい。

～今後のまちづくりの担い手育成について～

岡部氏：まつりなどの地域活動への住民の参加度は高いので、徐々にその他の活動への割合を増すよう促したい。

三輪氏：学校は地域学習など地域との関わりを求めているので、中学や高校との連携も深めてはどうか。

高野氏：まちづくりに関心がある人でも歴史のある会への参加は敷居が高いと感じるのかもしれない。部会のような新しい会への参加を促してはどうか。

以上、約3時間に渡って岡部会長、パネラー3名、そして参加者の熱いディスカッションの後、浜坂支部支部長西尾高雄氏が閉会の挨拶で、支部として清流会を全力で応援するという声明とともに、フォーラムは終了した。



左より 高野氏、浅見氏、三輪氏、萩原



会場の様子

◆ 懇親会 於 浜坂温泉 魚と屋（ととや）

パネラーの高野氏、浅見氏を囲み、浜坂支部、まちづくり委員会のメンバーが、浜坂の海の幸づくしのお料理と解禁直後の今年一番の浜坂ガニを堪能しつつ、まちづくり談義、それぞれの地域の話を通して更なる交流を深めた。



◆ オプション 11月10日（土）

まちづくり委員会の有志で、浜坂及び近郊の見所を巡った。新温泉町山陰海岸ジオパーク館では、鳥取県から丹後半島に至る海岸線の壮大な景観の映像を堪能し、館長からは日本がかつて大陸の一部だった 2500 万年前から現在の姿になる 160 年前までの経緯を手作りの模型を交えて丁寧にレクチャーしていただいた。

その後、浜坂出身の登山家 加藤文太郎記念図書館、浜坂駅前の案内所「松籟庵」を訪ね、地元の名菓栃もちを堪能した後、鉄道マニアの聖地、余部鉄橋へ。鉄橋の麓ではかつての鉄橋の一部を間近に見ることが出来、改めてその迫力に圧倒された。昨年完成したばかりのクリスタルタワーのエレベーターで一気に40m上がり、旧軌道を歩いて空の駅を見学した後、円山応挙の襖絵で有名な大乘寺を参拝し、帰路についた。

浜坂のまちは、人々の暮らしとその思いが何百年も積み重なって作り上げられた景観を守りたい！という清流会の強い気持ちに溢れ、2500 万年前に遡る独自の地形や明治期の鉄道遺産、浜坂が生んだ登山家、歌人など、その背景となる自然、文化、産業もまた特筆すべきものばかりである。グルメ日帰り旅では決して見る事の出来ない浜坂の魅力を堪能するために、ぜひ多くの方に脚を運んで、地元の方々とふれあってもらいたい。



新温泉町山陰海岸ジオパーク館



館内から浜坂ビーチを望む



余部鉄橋「空の駅」



11月10日 神戸新聞 朝刊